

近江商人の合理性と経営倫理

On the Rationality and the Business Ethics of OHMI MERCHANTS

小倉 幸雄*

目次

- I. はじめに
- II. 近江商人の特徴
 - 1. 近江商人とは
 - 2. 近江商人発祥の理由
 - 3. 近江商人の特徴
- III. 近江商人の合理性
 - 1. 経営の特徴
 - 2. 合同企業
 - 3. 会計システム
- IV. 近江商人の経営倫理
 - 1. 経営倫理と合理性
 - 2. 近江商人の経営倫理
- V. 結びにかえて

左記の表は、企業不祥事の発生原因に関して、日本監査役協会のおこなったアンケート結果¹⁾である。

この表から、経営者が独善的になったり、業績至上主義に陥ったとき、正しい判断ができずに、重大な問題を引き起こしている実態が読み取れる。その根底には、本来歯止めとなるべき倫理観の欠如があると推察できる。それは、現代の日本社会の存在にも関わる大きな問題となっている。しかし、必要とは解っていても、その解決には大変な困難をとまなうものである。

この点について、日本経営倫理学会は、「経営倫理教育の特徴は、それが知識の教育だけではなく、価値観や判断力の教育と関係しているということである。つまり、

- ・知育教育
- ・徳育教育

の両方が必要になるということである。知っているだけでなく、行動で示すことが重要だからである。知識教育だけでは教育の仕方が分かりやすいともいえるが、価値観や判断力となると一体だれが、何を教えるのか、そもそも教えたり学んだりすることが可能なのかという難しい問題につきあたる。これは、通常他の知識教育では見られない倫理教育の特徴である。」²⁾と指摘している。

ところが、今から約400年も前に現代にも通じる合理的な経営システムを構築する一方、独特の経営倫理を有し、日本全国で活躍し、商人の手本とされた人々がいた。

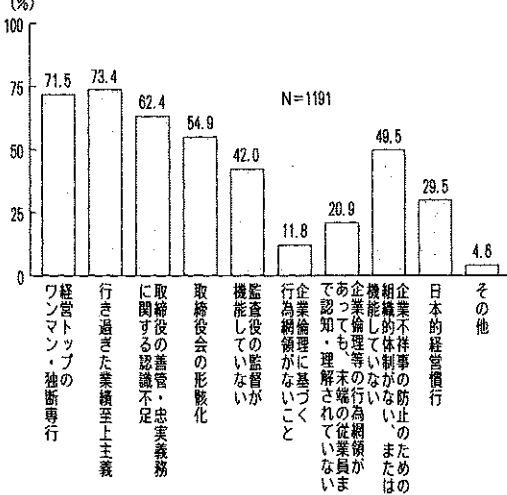
それが、近世、近江商人である。その商法は今日にも通じる要素を含んでいる。

そこで、本稿では、近江商人に焦点をあて、

I はじめに

近年、我国に於いて、倫理観の喪失に端を発する問題が多発している。具体的な企業名をあげるまでもなく、企業の場合、それが命取りになることも少なくない。

表1 企業不祥事の発生要因に関するアンケート結果



出所：『企業倫理に関するアンケート調査報告書』日本監査役協会資料、1997年。

* 経営学部助教授

その特徴となっている、経営システムの合理性と、基礎となっている経営倫理について検討を加え、最後に、そこに強い影響を与えたと考えられる近江の地域性と、その特徴の1つである仏教に焦点をあて検証するものである。

なお、近江商人の伝統と現代企業との相関については、次の中川助教授の論文に委ねるものである。

II 近江商人の特徴

1. 近江商人とは

(1) 近江商人という呼称

元来、近江商人という呼称は、他国の人からつけられたものである。

近江商人以外にも、富山商人、甲州商人、紀州商人、伊勢商人、大阪商人、江戸商人、名古屋商人、博多商人等、地名を冠する商人が多数が活躍していた。このうち、近江商人、富山商人、甲州商人、紀州商人、伊勢商人は、その出所を冠としたものであり、大阪商人、江戸商人、名古屋商人、博多商人等は、その居住都市を冠したものである。

これらの呼称は、単に生国や所在地の呼び名にとどまらず、その商売のやり方、性格の違いを意味して使用され、その商人と取引をした人々から畏敬の念を込めて呼ばれていた。

(2) 近江商人の定義

前述したことから明らかなように、「近江商人」という呼称は、その生国である「近江」を冠とした呼び名である。

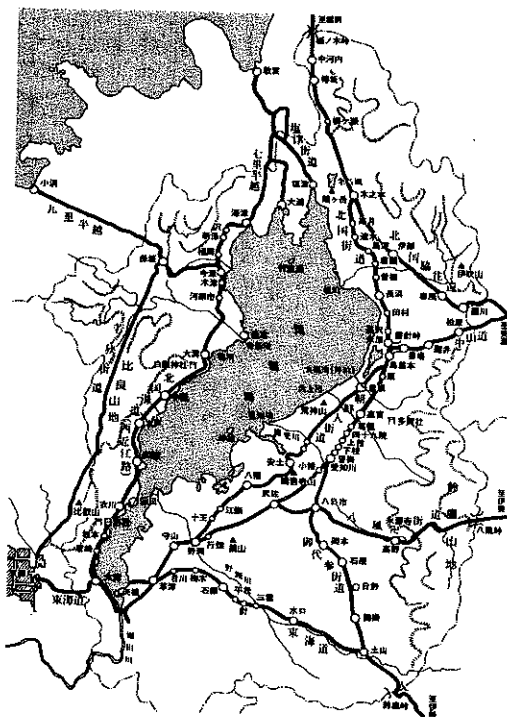
しかし、近江の国で生まれ育ち、地元の近江国中で商売をしていた地廻り行商人などは「近江の商人」であっても、「近江商人」ということはできない。

また、近江の国で生まれ育ち、他国に出て商売をしても、近江との関わりが途絶えてしまえば、近江商人ということとはできない、あくまでも、近江国に本家を置き、それが全事業を統括する本部機能有していなければならない。

したがって、近江商人とは、「近江国に本拠をおく、他国稼商人のこと」³⁾と定義すること

ができる。

地図1 近江付近の街道



2. 近江の地域性

近江商人を生み出した近江の地域について、その特性を、自然環境と交通から見てみる。

(1) 近江の自然環境

近江は、中央に日本最大の淡水湖、琵琶湖があるため、「淡海の国」といわれ、それが近江国と称されるようになったといわれている。

東に伊吹、西に比叡、比良、丹波、南に信楽、鈴鹿、北に野坂の山地に取り囲まれ、それぞれの山脈を源として、草津川・野洲川・日野川、愛知川・犬上川、姉川・高時川、安曇川が琵琶湖に流れ込み、そこに、沖積平野、湖南平野、湖東平野、湖西平野が形成され、穀倉地帯となっている。しかし、一方、新たな農地が少なく、また、水害や旱魃などが、度々発生する地域でもあった。

(2) 交通の要衝

近江は、東日本と西日本とをつなぐ結節点に位置し、東を伊勢(三重県)と美濃(岐阜県)、西を山城の国(京都府)、南を山城の国(京都

府)と伊賀(三重県)、北を越前(福井県)と若狭(福井県)と接している。

次頁の地図からも明らかなように、この地を俯瞰すると、街道が、琵琶湖を取り囲むように、東西南北、縦横無尽に走り、交通の要衝ともなっている。

その主な街道をあげると、管路として認知された七街道のうち、東海道、中山道(東山道)、北陸道(北国街道)、さらに、北国脇往還、御代参街道、八風街道、柚街道、朝鮮人街道、若狭街道、九里半街道がある。

さらに、中央に位置する琵琶湖を利用した海上交通の盛んでもあった。

3. 近江商人発祥の理由

では、何故、近江商人が生まれたか。その理由について、上記の地域特性を踏まえて、様々な説⁵⁾が唱えられている。

① 廃城奮起説

戦国時代から近世にかけて、近江は重要な戦略的・経済的拠点であった。このため諸侯の転封など大名の居城が廃城となり、城主を失った住民たちが行商に出たとする説。

② 渡来人説

近江、特に湖東地方には早くから朝鮮半島からの渡来人が多く居住し、高い文化が形成されていた。そのことが、商人を続出させることとなったとする説。

③ 武士起源説

廃城により生活に困窮した武士が商業に生きる道を求めたとする説。

④ 農民起源説

広い湖東平野もすでにすみずみまで耕されて、新たな農地が少なく、また、水害や旱魃などが、度々発生して、生活が困窮。それを打開するために商いを始めたとする説。

⑤ 市座説

中世延暦寺の荘園の市場が発展し、市座が生まれ、四本商人・五箇商人などの座商人が活躍。その後、発生する近世の近江商人の基となったとする説。

⑥ 交通要衝説

近江は日本の中心に位置し、主要道の東海道や中山道、北国街道などが通り、物資の運搬に都合よく、また、商品情報がいち早く入手できる交通の要衝地であったことから商人が発生したとする説。

⑦ 帝都接近説

京など都に近く、商品需要も多かったため、その需要をみたす商業活動が盛んとなったとする説。

⑧ 湖上移動習慣説

日本最大の湖、琵琶湖を利用して、早くから湖上交通が発達し、それに従事していた人たちが商人となったとする説。

⑨ 混合説

近江は中世から商人の他国進出の実績があり、江戸時代になって治安が良くなり、また交通条件の改善により多くの商人が生まれた。

しかし、以上の説は、近江全体について、分析したものであり、近江商人が高島、八幡、日野、湖東(愛知、犬上、高宮、五箇荘)の特定の限られた地域から発祥し、主要都市である大津、今津、彦根、長浜からは出ていないことからすれば、どの説にも長短があり、特定の説に断を下すことはできない。

しかし、この近江の地こそが、近江商人の独自性を形成したことは、いうまでもない。

4. 近江商人の特徴

(1) 近江商人の特徴

前述したように、各商人の呼称は、単に生国や所在地の呼び名にとどまらず、その商売のやり方、性格の違いから区分し、その地域の商人に対して同一的に使用していた。

各商人の特性を、商家の理想像を題材として表現した言葉に、

「主人は大阪、女房は京都、番頭は江州(近江)、蔵番は長崎、小供は江戸」⁶⁾がある。

では、近江商人の特徴とはなんであろうか。

その特徴として、次の点をあげることができる⁷⁾。

① 行商形態

同じ時代に行商を主としたものには、他に富山の薬売商人があるが、これは取扱商品が合業のただ一種類に限られたのに対し、近江商人のそれは呉服・太物・麻布・蚊帳・漆器・小間物・合業その他、多種多様であった。

②全国各地への出店

出店した後は、その店を拠点としてその周辺においてなお行商を続ける場合と、これを転機として店舗商業に移行する場合とがあった。これも富山商人と異なる点である。

③多岐に渡る営業の種類

営業の種類が多岐にわたったこと、すなわち商業ばかりでなく、金融業・醸造業・絞油業・漁業等に至るまで手を伸ばしたことは前述の通りである。近江商人の中に、このような各種の営業に従事する者があったというばかりでなく、一人の近江商人にして、このような各種の営業を多角的に営む者もあった。

④合理的な経営

近江商人の特徴として、秀でた合理的な経営をあげることができる。

合理的経営の1つの現われは、共同企業形態であり、資本を集中するばかりでなく、多くの有力商人の信用の結合をはかるために営まれたといわれている。

今1つは、会計システムである。近江商人の店舗においては各種の帳簿が整備していたのみでなく、記帳方法も非常に進歩し、原理的にはすでに複式簿記の水準にまで到達していたといわれている。

次に、この経営の合理的側面に焦点をあてて、論を進める。

Ⅲ 近江商人の経営の合理性的側面

1. 経営の特徴

近江商人の経営の合理的側面に着目し、その特徴をあげると、以下の点となる。

①合同企業

合同企業という企業形態を持ち、統括本部としての本店（近江）を中心として、独立性の高い支店（地方）とのネットワーク組織を構築し、

それを1つの企業として全国規模で展開していた。また、経営家族主義に基づいた従業員管理と人材育成システムを構築していた

②会計システム

独自の会計システムを生み出し、正確な会計帳簿を作成するとともに、その成果を算定していた。これにより、遠隔地に分散している各支店の事業内容を統一的に掌握するとともに、資金だけでなく各事業を、企業全体としての総合的に管理していた

③経営理念の継承

経営システムの基礎として、家訓、点則の形で、その経営理念をまとめ、継承してた

以下、それぞれについて、検討を加える。

2. 共同企業

近江商人の企業形態は、もとより個人企業が主であったが、中には数人資本を出し合わせて、組合商合とか乗合商合と呼ばれる、いわゆる共同企業を営んでいた。それは、合資形態であり、資本を集中するばかりでなく、多くの有力商人の信用の結合をはかる目的で営まれたといわれている。

(1) 共同企業の動機

近江商人が共同企業を営むに理由に至った動機について、中井家（江戸時代の最高峰に位置する大商人）を例にとってみると、次の三種に分類できる⁸⁾。

①借金の滞り

当初現地の人が個人企業として経営していたものが、なんらかの必要から中井家へ金融を求めることとなり、その借金が返済不能となるに及んで、ついには経営管理の実権を中井家へ引渡すに至った場合である。

この際自分は、ほとんどその店の支配人に近い地位に身を落とすことを余儀なくされる。しかし家屋敷などを出資の一部として認めてもらい、かつ実際運営の労力おも出資同様の取扱いを受けることによって、純然たる使用人とは区別される。

②事業規模の拡大を意図した現地企業の要請
はじめ貸借関係が全然なかったとはいわない

が、現地企業者が、一層活発にこれを行なわんがために、中井家に出資を求めた場合である。

この場合は実際の運営はもちろん、現地企業者に一任されるが、現地企業者は同時に出資者としての資格も強く確保している。

③別家を出店または枝店に取り立てる

別家を出店または枝店に取り立てる場合であって、資金は別家の自財のほかに、中井本家あるいはその出店からも出資する。経営は別家がこのに当たるが、店卸の節には本家の者が立ち会うなど、種々の制約を受ける。

以上の三つの場合を通じて、いずれも中井家が主たる出資者であり、したがって最高の指揮権は握っているが、実際の運営は現地の企業者がこれに当たる。出資金に対しては利子をつける。利子率は年一割ないし八歩程度で、場合によって異なる。実際の運営の任に当たる人に対しては、一定の報酬を出す。これを賄料とか、世話料とかいった。けだし出資金に対して利子を払うのと同じ意味において、これは労務出資に対する利子と解される。この報酬もまた前例によれば、五両・十両・十二両と種々な場合があるが、企業開始当時の事情や、商売の規模の大小などによって異なるものと思われる。これらは経費として勘定され、それらを除いた純益(徳用)が出資者の間に配当された。もちろん労務出資者もこれに均霑するが、共同企業が二人だけの場合には、利潤は「弐ツ割」、すなわち折半するのが一般であった。

(2) 中井家の例

中井家の全国への展開をまとめてみたのが、上記の図⁹⁾である。

東日本を中心に、全国に支店が展開されている。

3. 近江商人の会計システム

全国展開している組織を支えていたのが会計システムである。会計システムの整備こそ、経営の合理化の程度を測る指標の1つともいわれている。

(1) 中井家の会計システム

近江商人の会計においてももっとも進んだシ



テムを採用していたことが判明しているのは、中井家である。

中井家では、売り場には「売立帳」、倉庫には「仕入帳」、帳場格子内(結界)には「金銀出納帳」。他に「経費帳」「売掛帳」「買掛帳」「給金帳」など多数の帳簿が、店内の各分担場所にそれぞれおかれていた。現金で一両売ると、売り場の「売立帳」に収益として記帳する一方、帳場格子内の金銀出納帳にも一両入金が入記された。

一日の仕事が終わった後、各持ち場の担当店員が帳簿を持ち寄って、照合(帳合わせ)し、その正誤を検証した。(帳合の法といわれる所以である。)

この毎日の記録は、一定の時期に大福帳に合計して転記された。これが洋式簿記の総勘定元帳にあたり「多帳簿複式会計」と呼ばれる。

この多帳簿複式会計の中核をなすのは金銀出入帳と大福帳である。金銀出入帳は現金出入の記録を通して、総ての資産を統括する意味を

もつとともに、記帳された現金の記録が最終的に手許現金と合致することで取引記帳の正誤をも検証する。

「同家の家法などに定められた帳簿規定では、金銭出入帳への記入は毎晩あるいは隔日に支配人立会のもとに次役が行い、諸帳面から大福帳への転記は細かいことも残さず写し取り、年数経っても明瞭に分かるように記入しておくことが求められていた。」¹⁰⁾

さらに、中井家をはじめとする近江商人の自家では、遠隔地に展開する支店をいかに管理するかが課題であった。

中井家の会計システムは、本家が多数の支店に配置した資本を管理し、出店の経営能率を批判・刺激すること主眼において展開されたものである。

すなわち、中井家では、「有効な会計管理を行なうことが最も必要であった。そのため本家は、毎年各出店が、それは枝店→支店→本家と、末端から順次追上がって合併されてゆくようになっていた。その決算報告書が店卸目録と呼ばれるもので、それは本家へ提出されるに先立って、各出店においてその内容が『店卸帳』に浄書された。店卸目録は毎年一冊に綴られて本家へ送られたが、店卸帳は累年記録で大冊を成し、それぞれの出店に保管された。本家では送付されてきた各出店の店卸目録を検討し、それらを合併して、本家の店卸帳を作成した。

かくて店卸目録が本支店会計の中核となるが、各支店の店卸目録の作成については、その先行過程として、各原始記録から大福帳のそれぞれの勘定口座への転記がなされた。このような大福帳の記載に基づき、これを整理集計し、貸借対照表に相当する資本計算的成果計算と損益計算書に相当する損益計算的成果計算との複式成果計算の体系が構成された。」¹¹⁾

さらに、中井家の会計システムでは、過去計算だけでなく、「一方においては利益目標を指示し、他方においては支配人に対する刺激制度を設けていた」¹²⁾ このことも注目に値する。

このように、中井家をはじめとする、近江商

人の会計システムは、本支店会計を通じて発達したのであり、多数の出店群を有効に管理統制する仕組みになっていた。

IV 近江商人の経営倫理

1. 近江商人の経営倫理と合理性

(1) 経営倫理の必要性

しかし、どんなに合理的な優れた経営システムを有しようとも、企業が社会と関わって存在する以上、社会的存在として認知されなければ、その存在は困難である。その為には、私利に走ることなく、周囲や地域の人々との連携が必要である。特に、他国からの進出でえある近江商人にとっては、それが死活問題となる。そこで、近江商人は、必然的に独特な経営倫理を有し、業績至上主義に歯止めをかけたからこそ生き残ることとなる。

(2) 経営倫理と合理性

「経済と道徳」、「合理性と経営倫理」の関係は、洋の東西を問わず、古くから論議されてきた重要問題である。

この点について、経営倫理研究会は、「西洋の考え方では、『功利と義務・ルール』、『契約』、『人権』、『正義』、『公正』などの価値基準が中心になる。

日本の考え方では、『正直』、『義と利』、『利他と自利』などの価値基準が中心になる。

特に、東洋や日本の先哲は、自利と利他の対立矛盾を、『利他を以て即ち自利となす』(最澄)、『自利利他円満』(自らを利益し、他の衆生をも利益する二つの徳—自利利他の徳がまどかに満ち備わっていること)(親鸞)、『利行は一法なり、普く自他を利するなり』(利他と自利とを分けて考えるのは誤りである。利行は誰にたいしても利行なのであって、それは自分をも人をも利することなのである)(道元)等の『仏教的な考え方』で超克した。」¹³⁾

と、仏教からの影響を示唆している。

2. 近江商人の信仰と経営倫理

(1) 仏教からの影響

近江商人においても、仏教からの影響が顕著である。この点について、江頭恒治教授は、次の様に述べている。

「近江商人の商法の真髄は、正直と堅実であり、勤勉と儉約であったが、このような精神が根本的には何に胚胎したかといえ、それは疑いもなく、神仏に対する信仰と儒教の教えであったと思う。家憲や店別には必ずといってよいくらい、神仏に対する帰依が説かれてあり、また儒教的倫理が述べられている。神と仏とは並置されていて、両者の間にいささかも対立・矛盾を感じたような気配はない。神・儒・仏が渾然一体となった日本的エトスこそが、近江商人の商人道の基盤であり、これが、ともすれば奔騰せんとする商魂にわくをはめたものと思う。」¹⁰

上記の様に、近江商人においても、その経営倫理を生み出す根底には、かれらの宗教意識あるいは信仰を指摘することができる。

(2) 近江の寺院数

以上述べてきた様に、経営倫理の形成には、仏教が大きく影響しており、近江商人では、特に、その要因として、「近江の小寺」という仏教信仰の盛んな地柄を見逃すことはできない。

現在でも、滋賀県は、全国でも有数の仏教信仰県であり、寺院保存の法物や仏教関係の地名の多さなど、特徴的な宗教環境を形成している。

滋賀県の仏教系寺院の分布を、各都道府県における仏教系寺院の分布と関連させて、その特徴を把握すると次の通りである¹⁰。

①宗教法人数

宗教法人数についてみれば、

仏教系	64.4% (3,118)
神道系	31.2% (1,511)
諸教系	3.7% (180)
キリスト教系、	0.6% (29)

であり、大半を仏教系が占めている。

②仏教寺院数

仏教系寺院についていえば、

第1位 愛知県	4,825カ寺
2位 大阪府	3,362カ寺

3位 兵庫県 3,255カ寺

4位 滋賀県 3,118カ寺

この数値は、明治以来ほとんど大きく変化していない。

③宗派別・系統別

多い順に列挙すると、

真宗大谷派	791カ寺
浄土真宗本願寺派	610カ寺
浄土宗	472カ寺
天台宗	282カ寺
曹洞宗	204カ寺
真宗仏光寺派	140カ寺
天台真盛宗	106カ寺
臨済宗妙心寺派	61カ寺
臨済宗永源寺派	55カ寺
黄檗宗	51カ寺
真宗木辺派	48カ寺
日蓮宗	43カ寺

となる。

系統別の分布をみると、

真宗系	51.3% (1,598カ寺)
浄土宗系	15.6% (486カ寺)
天天台宗系	13.0% (405カ寺)
禅宗系	13.0% (405カ寺)
真言宗系	3.1% (96カ寺)
その他仏教系	2.3% (73カ寺)
日蓮宗系	1.8% (55カ寺)

となる。

④分布密度

仏教系寺院の分布密度を、昭和58年4月1日現在の統計を使用して、人口、世帯、面積の側面から捉えてみる。

仏教系寺院は全国に、

1平方キロメートルあたり	0.21カ寺
1,000人あたり	0.65カ寺
1,000世帯あたり	2.1カ寺

となり、4.9平方キロメートル、1,527人、482世帯ごとに1カ寺が存在する

滋賀県の場合は、

1平方キロメートルあたり 0.77カ寺
 1,000人あたり 2.79カ寺
 1,000世帯あたり 10.2カ寺
 となり、1.3平方キロメートル、358人、98.2世帯ごとに1カ寺が存在している。

1寺院あたりの人口比、世帯比は、他府県の数値と著しい相違をみせており、「近江の小寺」といわれる通説を証明するものである。

また面積比も、大阪、東京、愛知、神奈川の各現に続いて高く、寺院分布の濃密さを端的に示している。

しかし、近江商人の倫理観形成においては、寺院の数だけが問題ではない。さらに、その質、内容に重要なポイントがあると考えられる。

仏教においては、「聴聞に始まり聴聞に終わる」とも、「師のない仏教はない」ともいわれ、師から教えを聴聞し、自分と照らし合わせ、実践すること、すなわち、聞・思・修が基本であるといわれている。

近江商人に関わる伝記や古文書等によれば、近江商人の活躍した近世においては、先にあげた数多くに寺院を拠点として、数多くの説法会が開催されていたと、伝えられている。しかも、その説法会は、その寺院の僧侶だけでなく、交通の要衝という地の利を活かし、他国から僧侶を招いて開催されていた。その中には、有名な僧侶や高德の僧侶も含まれていた。

以上のことから、近江商人は、常に、かつ、深く、仏教に親しんでいたことが理解できるのである。

(3) 近江商人の信仰と経営倫理

上述の様な宗教環境のもとで、近江商人は、仏教を基とすることにより、合理性と経営倫理とを違和感なく融合し、商売を営むことができたのである。

その代表として、中井源左衛門良祐、松居久左衛門遊見、伊藤家忠兵衛をあげてみる。

①中井源左衛門良祐

中井家、初代中井源左衛門光武（晩年、良祐と号す）は享保元年（1716）近江の国蒲生郡日野に生まれ、19歳の時、日野椀の行商から身を

興し、漆器、糸、葉ほかの産物廻しを始めとして、金融業、酒味噌の醸造業等多角的に事業を営み、晩年には、8万7千両の資産を持つ、大商人となった。

中井家は代々浄土宗であった。

良祐の晩年の作である『金持商人一枚起請文』「もろもろの人々沙汰し申さるゝは、金溜る人を運のある、我は運のなき杯と申は、愚にして大なる誤なり。運と申事は候はず。金持にならんと思はば、酒宴遊興著を禁じ、長寿を心掛、始末第一に、商売を励むより外に子細は候はず。此外に貪欲を思はば、先祖の憐みにはずれ、天理にもれ候べし。始末と吝きの違あり。無智の輩は同事とも思ふべきか。吝光りは消えうせぬ。始末の光明満ぬれば、十万億土を照すべし。かく心得て行ひなせる身には、五万十萬の金の出来るは疑ひなし。但し、運と申事の候て、国の長者とも呼ぶゝ事は、一代にては成がたし。二代三代もつづいて善人の生れ出る也。それを祈候には、陰徳善事をなさんより全別義候はず。後の子孫の著を防んため愚老の所存を書記畢。

文化二乙丑年正月

九十翁 中井良祐識」¹⁰⁾

は、いうまでもなく、日本浄土宗の開祖、法然上人の『一枚起請文』にならい、勤勉、実直、正直、堅実を旨として、営利と道徳の一致を説いたものであり、良祐の信心の表白であるとともに、商売のエッセンスを凝縮しており、中井家の家訓の中心となった。永く一門に尊重され、後には、全国各地から注文があり、商家の家訓にされたほどのものである。

②松居久左衛門遊見

松居久左衛門松居遊見（1770～1855）は本名を久三郎といい、40歳のとき父行願の没後を受けて家業を継ぎ、久左衛門を襲名した。

遊見の篤信者ぶりについて、『近江神崎郡志稿』には、次の様なエピソードがある。

「遊見は仏教信者で其信念は極めて堅固であった。……朝夕の看経に正信偈を、一度の読上げれども読足らぬとて、二度も三度も繰り返した事があり、夜でも昼でも念仏を唱へ、所謂行住坐臥時と所とを嫌はずの様であった。或鼠賊

が官に捕へられ其自白した口供中に、曾て此家に入らうと、毎夜あたりに忍び窺ふに、いつも念仏の声がして遂に這入れなかつたとの事である。東本願寺の講師徳龍に帰依し、常に其法話を聴き随喜したいといふ。」¹⁷⁾と。

遊見について、芹川教授は次の様に分析している¹⁸⁾。

「遊見は、始末や才覚に一段とすぐれていた。それだけでなく、算用の点においても、極めて緻密な計算性をもっていた。松居家に伝わる永代『書出帳』には毎年の資産の総計と、それを前年度と比較した『延』あるいは『損』が記入されているだけでなく、その年々の金・銀・銭および米の相場が几帳面にしるされている。

遊見の蓄財をささえた経済精神は、『精を出す』こと、『正直』でごまかさぬこと、『質素儉約』を守ること、であった。このことはかれが自ら書いて知人に頼った次の語句によっても察せられる。

『出精専一之事、無事は貴人、一心、端心、

正直、勤行、陰徳、不著不貪是名大黒』

さらに遊見は、各種の社会奉仕をおこなっている。天保の飢饉の折は、糸の廉売をおこなったり、彦根侯に金千両を献上したりした。

その他、1823(安政六)年の東本願寺焼失の際には報恩講をたてて奉仕し、京都御所焼失時(1855年)には六百両を献上したりしている。」¹⁹⁾

③伊藤家忠兵衛

現在の「伊藤忠」と「丸紅」の始祖、伊藤忠兵衛(1842~1903)は、浄土真宗本願寺派の信徒であったことが知られている。

『伊藤忠商事100年』によれば、

「彼ワ ツネニ 二代目忠兵衛ニ『タトエ 全事業 全財産ヲ ウシナウ トモ、他力安心ノ信仰ワ ケッシテ ウシナウナ』ト イイノコシタ」²⁰⁾とあるように、熱心な信者であった。

その座右の銘に、

「商売は菩薩の業、商売の道の尊さは、売り買い何れも益して世の不足をうずめ、御仏の心にかなうもの」²¹⁾(商売は菩薩の仕事である。仏様に成り代わって売り買いし、世間の過不足をうめていく行為を行うのが商人である。したがっ

て仏様の御心にかなうものでなければならない)とある。このことから、商売そのものを仏道実践と捉えていたことが推察できる。

以上のように、近江商人は、近江という信仰心が育みやすい地域を拠点とすることにより、仏教精神を基として、合理性と経営倫理とを矛盾なく融合し、実践することができたのである。

V 結びにかえて

以上、本稿では、近江商人に焦点をあて、まず、近江商人を「近江国に本拠をおく、他国稼商人」と定義し、その上で、その地域特性を踏まえて、その合理的側面について、共同企業と会計システムについて論じた。

近江商人の合理的経営の1つの現われは、共同企業形態である。それは、資本を集中するばかりでなく、多くの有力商人の信用の結合をはかるために営まれたといわれている。

今1つの合理的側面は、会計システムである。近江商人の店舗においては各種の帳簿が整備していたのみでなく、記帳方法も非常に進歩し、原理的にはすでに複式簿記の水準にまで到達していたといわれている。

さらに、経営を支えたその倫理観について、そこに強い影響を与えたと考えられる近江の地域性として、特に、仏教を取り上げ検討を加えた。

近江商人に限らず、合理性を支える技術は、教えることも、それを継承することも、それほど困難ではない。しかし、近江商人の精神性については、一朝一夕にできるものではなく、それは、親から子、子から孫へと、信仰を通して伝えられ、継承してきたものである。

換言すれば、近江商人は、「近江の小寺」という仏教信仰の土地柄に育まれることにより、自然な形でその心の奥底に、仏教精神が生まれ、合理的な経営システムを構築する一方で、高い倫理観を有していた。また、近江の地を離れず、そこに本部として持ち続け、経営家族主義を貫くことにより、近江で育った倫理観の高い人材を補給しつづけることができたのである。

これらの要件が揃うことにより、近江商人の強さが形成されたと見ることもできよう。

では、現代の企業ではどうか。滋賀大学中小企業研究会のアンケート（近江の様々な要素につき、事業経営上メリットと思われるか、デメリットと思われるかについての問い）によれば、次のような結果が報告されている。

「メリットとするものが多い順に見ていくと、まず道路事情についてはメリットとするものが69.5%と圧倒的で、デメリットとするものは15.6%にすぎない。自然環境もメリットが69.0%、デメリットは7.1%にすぎない。近江商人の伝統はメリットが50.8%、デメリットは10.5%となっている。以上の道路事情、自然環境、近江商人の伝統の3つはメリットとするものが過半数をこえ近江を代表する事業経営上の好条件であるといえよう。

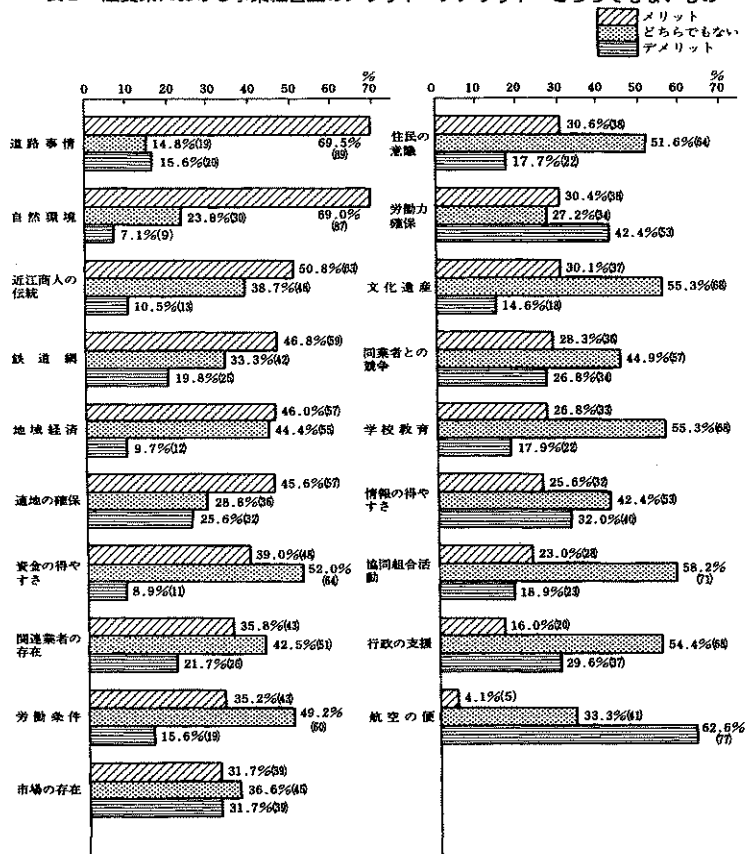
このうち道路事情、さらには自然環境については他の都道府県でもメリットとしてあげられる場合もありえようが、3位にはいった近江商人の伝統はまさに近江にしかありえないメリットであり注目される場所である。近世以降に全国に雄飛した近江商人の有形・無形の今に続く財産と伝統が現在の近江企業家の事業展開に望外のメリットをもたらしているのである。」²²⁾

このように、近江商人の伝統は、その技術というよりは精神性のことであり、それは、長い時間を掛けて、親から子、子から孫へと伝承され、培われてきたものであり、現在も少なからず、影響を与えているのである。

しかし、その形成の基盤となった仏教が衰退し、釈尊の正しい教えを伝える人々が少なくなったことは、非常に、残念である。

まさに、アメリカの教育学者ウェリントンが

表2 滋賀県における事業経営上のメリット・デメリット・どちらでもないもの



「宗教なき教育は、技倆ある悪魔を作る」と示唆した如く、歯止めをもたない社会が顕現しつつある。

なお、本研究は、地域経済研究所の共同研究プロジェクトの助成を受けて成されたものである。

さらに、現代企業において、近江商人の伝統が影響しているのか否か、その相関について、次の中川論文にて明らかにしていく。

【注】

- 1) 水野雅一編著、日本経営倫理学会監修『経営倫理』同文館出版、平成15年9月、p.74
- 2) 『同上書』、p.144
- 3) 上村雅洋『近江商人の経営史』清文堂、2000年、p.693
- 4) 藤井穰治編『近江・若狭と湖の道』吉川弘文館、小倉栄一郎『近江商人の理念』サンライズ出版を参考に作成
- 5) 五個荘町歴史博物館編『近江商人物語』平成14年3月、p.48
- 6) 入江宏『近世庶民家訓の研究』多賀出版、1996年、p.265
- 7) 江頭恒治『近江商人中井家の研究』(復刻版) 雄山閣、平成4年10月 pp.23~24
- 8) 『同上書』pp.795~796
- 9) 『同上書』p.14
- 10) 末永國紀著「近江商人」中公新書、2000年、pp.54~55
- 11) 江頭恒治『前掲書』p.842
- 12) 『同上書』p.801
- 13) 水野雅一『前掲書』pp.38~40
- 14) 江頭恒治『前掲書』p.26
- 15) 清水宏行『近江の無墓制と「ぼんなり」考』法蔵館、2003年3月、pp.158~161

平成15年度『宗教年鑑』によれば、愛知県4,634、大阪府3,362、兵庫県3,291、滋賀県3,210、であり、若干、数字の変動があるものの順位等は変わっていない。

- 16) 芹川博通『日本の近代化と宗教倫理』多賀出版、1997年、pp.238~239

- 17) 『同上書』pp.240~241
- 18) 『同上書』pp.242~243
- 19) 『同上書』pp.244~245
- 20) 伊藤忠商事株式会社社史編集室編『伊藤忠商事100年』伊藤忠商事株式会社、昭和44年10月、p.28
- 21) サンライズ出版編集部『近江商人に学ぶ』サンライズ出版、2003年、29頁
- 22) 滋賀大学中小企業研究会編『現代近江の企業家群像』中央経済社、平成5年10月、pp.82~83

(参考文献)

- ・小倉栄一郎『近江商人の経営管理』中央経済社、平成3年
- ・小倉栄一郎『近江商人の理念』サンライズ出版、2003年
- ・末永國紀『近江商人』中公新書、2000年
- ・上村雅洋『近江商人の経営史』清文堂、2000年
- ・サンライズ出版編集部『近江商人に学ぶ』サンライズ出版、2003年

